２００３年1月１０日

人間科学研究科委員長　殿

志岐　幸子氏　博士学位申請論文審査報告書

志岐　幸子氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱をうけて審査をしてきましたが、２００２年１２月１９日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

１、申請者氏名　　志岐　幸子

２、論文題名　　エリートジュニアサッカー選手の心理特性
　　―アスリートの感性研究へのアプローチ―

３、本論文の構成と内容

本論文は第１章から第７章までの本論と参考文献（計１８０頁）から構成されている。

第１章では、まず研究の背景において、競技者の人間性に触れながらスポーツの社会的役割について考察し、その教育的側面の重要性を指摘した。感性に関しては、従来の種々の分野における解釈を総説するとともに、著者自身が分析した一般人やトップアスリートの成人を対象に行った感性に対する関心度調査の結果も補足資料として付加した。サッカー競技は競技中にプレーヤー間のスピーディーな相互コミュニケーションが要求され、心理的側面との関連性が強いスポーツとされ、しかも最近では小学生の低学年頃からこのスポーツに取組む者が多い。本研究の目的は、サッカー競技に本格的に取組んでいるジュニア選手の心理特性を分析し、発育期プレーヤーの心理的要因の特徴からジュニア選手育成の問題点を探るとともに、日常面の心理的要因と競技面での行動様式との関連を検討して感性研究への手掛かりを得ることである。

本研究対象のサッカー選手はすべてＪリーグ傘下のジュニアチームに所属する男子の小学生（５、６年生）・中学生・高校生選手である。調査は、補足資料を分析し先行研究を参照して、感性に関連すると思われる日常面９０項目と競技面６８項目から成る２種類の調査票を作成して質問紙法により実施した。データ分析において、各群の特徴を把握するためには四分相関係数行列を用いた因子分析、因子間・項目間の比較にはピアソンの積率による相関分析、年代別の比較には一元配置の分散分析を行った。

第２章では、日常面における心理的要因に関連して、小学生の非スポーツ群（８９名）・レクリエーション群（１２１名）・アスリート（サッカー）群（９１名）の３群を対象に調査し比較検討した。

因子分析結果からは、アスリート群は非アスリート群より外向的でコミュニケーションが豊かであるが、感受性に乏しく自然に対する親和性にも欠ける傾向が見られた。レクリエーション群はアスリート群より親和性は強く、非スポーツ群より外向的であった。各項目における比較でも同様の傾向が見られ、サッカー少年は常に自信をもって家庭や地域社会と積極的にコミュニケーションをとるが、その反面、学校生活や自然などの競技以外の部分には比較的冷淡であった。

第３章では、Ｊリーグ下部組織のジュニア２チームに所属する小学生サッカー選手１７２名（5年生 85 名、6年生 87 名）を対象に、日常面での心理的要因と競技面での行動様式に関して調査しその関連性を比較検討した。

日常面における心理的要因の因子には、利己性、家族間コミュニケーション、共感・友好、親和性、学校内向性といった５因子が抽出された。競技面の因子では、ゲーム予知能力、チーム一体感、競技エゴイズム、チーム緊張性といった４因子が抽出された。因子間では日常面での利己性と競技面でのチーム緊張性の関連性が高かったが、項目間ではそれぞれ共感的行動とチームワーク、友人に対する共感性と予測・状況判断・冷静さなどに関連性が認められた。

第４章では、Ｊリーグ下部組織のジュニアユース４チームに所属する中学生サッカー選手２２７名（１年生５１名、２年生８８名、３年生８８名）を対象に、日常面での心理的要因と競技面での行動様式に関して調査しその関連性を比較検討した。

日常面における心理的要因の因子としては利己性、想像・表現、一体感、コミュニケーション、共感性の５因子が抽出された。競技面における行動様式の因子としてはゲーム予知能力、競技一体感、競技エゴイズム、協調性の４因子が抽出された。関連性が高かったのは、日常面・競技面それぞれ、因子間では利己性と競技エゴイズムや競技一体感の欠如、想像・表現とゲーム予知能力、コミュニケーションと競技一体感であった。項目間では直感と予測・独創的プレー、自然への関心とゲーム把握などであった。

第５章では、Ｊリーグユース４チームに所属する高校生サッカー選手１０３名（１年生３５名、２年生３６名、３年生３２名）を対象に、日常面での心理的要因と競技面での行動様式に関して調査し比較検討した。

日常面における因子としては利己的・多感、気づき・表現、一体感、冷淡さの４因子が抽出された。競技面では競技交流、競技消極性、競技エゴイズム、競技無責任の４因子が抽出された。両面間の高い関連性は特に項目間において見られ、それらは日常面と競技面それぞれ感受性と競技での予感、表現と競技の状況把握、誠実な行動と競技の冷静さ・チームワーク、自己中心性と競技での利己性などであった。

第６章では、Ｊリーグ下部組織チームに所属する小学生９１名、中学生１６２名、高校生１０３名、合計３５６名のサッカー選手を対象として、日常面での心理的要因と競技面での行動様式を調査し全体の傾向の分析と各年代間の比較を行った。

エリートジュニアサッカー選手は、一般的傾向としては、日常面においては周囲との調和やコミュニケーションがとれ、感受性も強いが、反面共感性に欠け、優柔不断で利己的な側面を有する。競技面ではゲーム予知能力があり、チームのコミュニケーションも取れるが、同時にチームワークを乱す利己的な側面も有していた。日常面と競技面の比較ではそれぞれコミュニケーションと競技調和性、非共感性と競技エゴイズム、学校利己性と競技非調和性に関連性が認められた。年代別の比較からは、小学生選手は家庭・学校・地域・チームと言った日常面、競技面ともに周囲との交流が最も活発で調和がとれて競技予知能力にも優れていたが、中学生選手を境にして、高校生選手では両面においてそれらが鈍化する傾向が見られた。特に日常面でのコミュニケーション、家族一体感、自然との交流や競技調和性においてその傾向が著しかった。

第７章では、本研究の総合考察と結論について述べた。

エリートジュニアサッカー選手において、感性に関連すると思われる項目による調査の結果、各年代でのそれぞれの特徴が明らかになるとともに、全体的傾向としては日常面における心理的要因と競技面における行動様式にある程度の関連性が認められた。高校生選手ではいくつかの要因において鈍化する傾向があり、小学生や中学生選手とはやや異なる特徴が見られた。

４、本論文の評価

本研究の意義と評価を以下のようにまとめることができる。

エリートジュニアサッカー選手を年代別に分析し、感性に関連すると思われる日常面での心理的要因と競技面での行動様式に見られる特徴を明らかにすることができた。

小学生選手では、家族間でコミュニケーションがとれ、共感的・親和的であるが、利己性や学校での内向性という側面も持っていた。競技面では予知能力があり、一体感を有するが、一方では利己的でチーム内では緊張状態にあった。中学生選手では、周囲とコミュニケーションがとれ、一体感を持ち、想像・表現力があり、共感的であるが、一方では利己的な側面も有していた。競技面では予知能力や協調性があり、周囲と一体感を持っているが、利己的な側面も見られた。高校選手では多感的で気づきや表現ができ、一体感を感じている反面、冷淡であるという日常面での特徴が見られた。競技面では周囲と競技交流をするが、消極的で利己的・無責任という側面も有していた。日常面と競技面の関連性では、中学生選手において最も多くの項目間で認められ、それぞれ利己性と競技エゴイズムや一体感の欠如、想像・表現とゲーム予知能力、コミュニケーションと競技一体感などであった。

エリートジュニアサッカー選手を全体としての特徴を明らかにすることができた。

エリートジュニアサッカー選手は、日常面では周囲と調和しコミュニケーションがとれ感受性も強いが、一方では共感性に欠け、優柔不断で利己的な側面も有する。競技面では予知能力がありコミュニケーションも取れるが、一方では利己的な側面も持っていた。日常面

と競技面の関連性では、それぞれコミュニケーションと競技調和性、非共感性と競技エゴイズム、学校利己性と競技非調和性において関連性が認められた。

このように、本研究のエリートジュニアサッカー選手において日常面における心理的要因と競技面における行動様式の間にある程度の関連性が認められた。この結果は従来のアスリートの心理に関する説とは異なるものであり、いわば感性との親和性が強いと思われる人間性と競技性との関連性を認めるものである。したがって、本研究はジュニアアスリートの心理特性を明らかにするのみでなく、アスリートの感性研究に新たな手掛かりを与えるものであり、この分野に寄与する研究として高く評価できる。

本研究の成果は、すでに研究論文として４編が感性工学会などの研究誌に掲載され、分担執筆ながら著書としても６編が出版されている。また本研究者はジュニアアスリートの育成に関するシンポジウムなどにおいてシンポジストも務めている。これらは本研究に対する高い評価と期待を示すものである。

５、結　論

上記のような評価を得て、本審査委員会は、志岐　幸子氏の学位申請論文が博士（人間科学）に十分値する研究との結論に達した。

以　上

志岐　幸子氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学人間科学部教授	医学博士（東京医科歯科大）	加藤　清忠
審査員	早稲田大学人間科学部教授	文学博士（早稲田大）	春木　豊
審査員	早稲田大学名誉教授	文学博士（早稲田大）	相馬　一郎